

## 奈良産業大学ビジネス学部における留学生の特徴

山本英司  
Yamamoto Eiji

### I はじめに

2009年度より奈良産業大学（以下、「本学」）は留学生の本格的受け入れを開始した。それ以前にもスポーツ推薦枠で日本の高等学校を卒業した留学生を受け入れた例が散発的に見られ、また、2008年度には比較的まとまった人数の留学生を3年次編入の形で受け入れたものの、入試形態の一つとして留学生枠を設けたのは2009年度からである。

留学生の受け入れはキャンパスの国際化を促進するとともに、本学の教育及び厚生補導に新たな課題をもたらすことともなっている。そこで本稿では、2007年度のビジネス学部設置時よりビジネス学部一年次教育・テキスト作成委員会が実施している「第1 Semesterにおける導入教育の自己評価に関する調査」の結果<sup>1</sup>を用いて、留学生の特徴の一端を浮き彫りにしようとするものである。

### II 方法

「第1 Semesterにおける導入教育の自己評価に関する調査」の実施主体はビジネス学部一年次教育・テキスト作成委員会であるが、具体的には、入学時及び第1 Semester終了時の年2回、1年次アドバイザーに依頼してビジネス学部所属の全1年次生を対象にアンケート形式で行われた。ただし、クラスによっては、第1 Semester終了時の調査が第2 Semester開始直前の履修登録指導時または第2 Semester中の授業時間等に行われた。アンケートは記名式で行われ、比較を可能とするため、入学時と第1 Semester終了時の両方に回答した学生のみが集計の対象となっている。アンケート回収状況は表1の通りである。なお、以下、「留学生」とは入学試験において留学生枠で入学した学生のみを指すものとし、スポーツ推薦枠等で入学した留学生は含まれないものとする。また、「日本人学生」には定住外国人及びスポーツ推薦枠等で入学した留学生も含まれるものとする。

---

1 公表された調査結果については奈良産業大学ビジネス学部一年次教育・テキスト作成委員会(2008)、(2009)、(forthcoming)を参照のこと。ただし、属性別の内訳は示されていない。また、奈良産業大学ビジネス学部一年次教育・テキスト作成委員会(2008)を用いた分析について山本(2008)を参照のこと。

表1 アンケート回収状況

年度	学生数	入学時		第1 Semester 終了時		両方回答	
		回収数	回収率	回収数	回収率	回収数	回収率
2007	116	108	93.1%	77	66.4%	76	65.5%
2008	94	83	88.3%	50	53.2%	46	48.9%
2009	135 (31)	132 (29)	97.8% (93.5%)	99 (27)	73.3% (87.1%)	98 (26)	72.6% (83.9%)
2010	116 (42)	107 (39)	92.2% (92.9%)	90 (34)	77.6% (81.0%)	86 (31)	74.1% (73.8%)

※( )内は留学生 (内数)。

アンケートは、「日頃の学習習慣・生活習慣」「学習態度」「学習スキル」の3領域計37項目について、高校時代または大学入学時と第1 Semester 終了時とのそれぞれの時期における自己評価を4段階で答えてもらったものである。これらは順序尺度であるが間隔尺度として近似できるとの仮定の下、平均値を算出して分析を行うこととした。その結果をグラフにまとめたものが図1～図9である。

図1 日頃の学習習慣・生活習慣(高校時代)

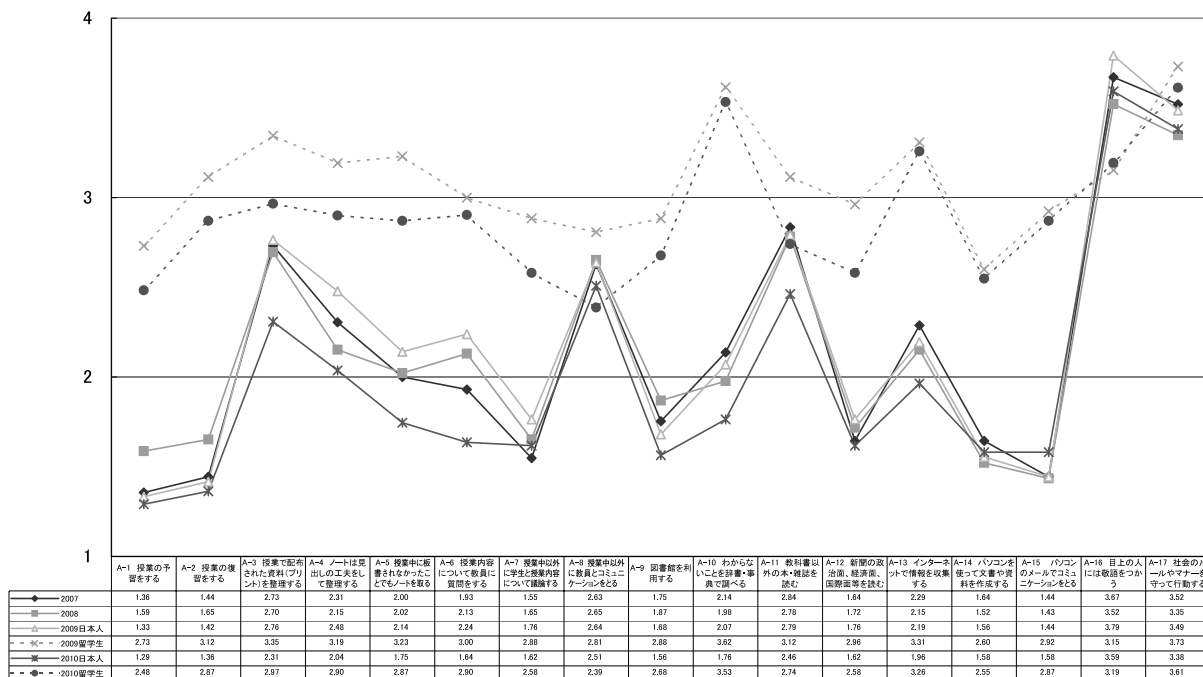


図2 日頃の学習習慣・生活習慣(第1 Semester 終了時)

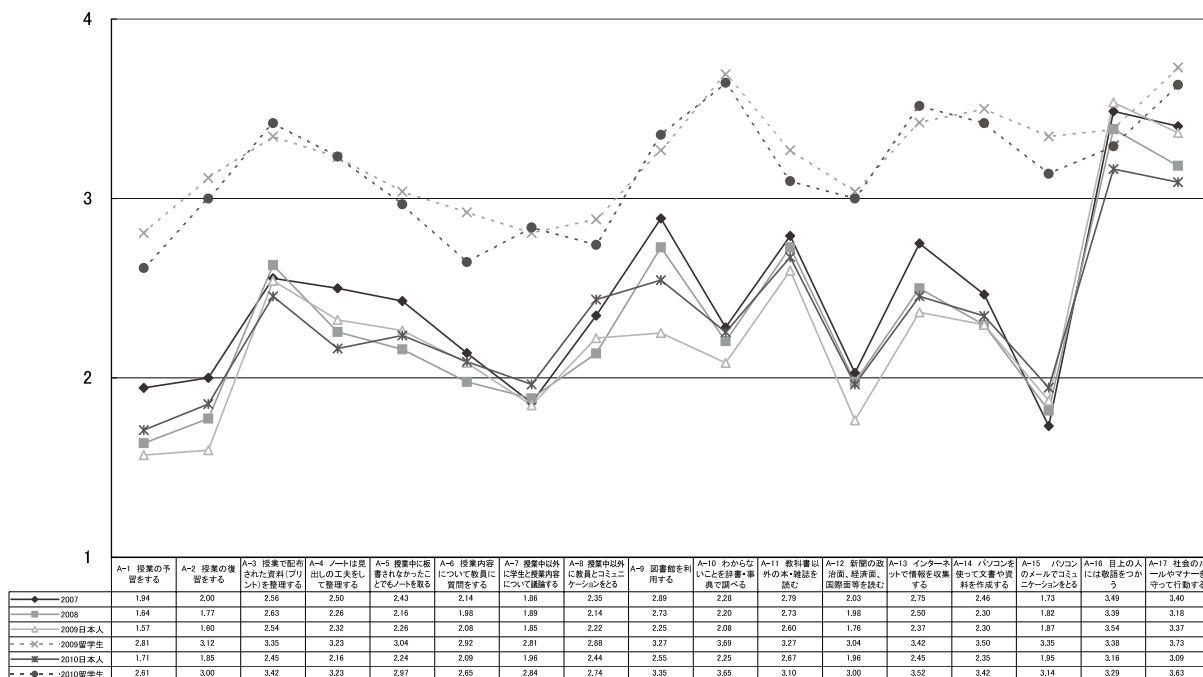


図3 日頃の学習習慣・生活習慣(伸張度)

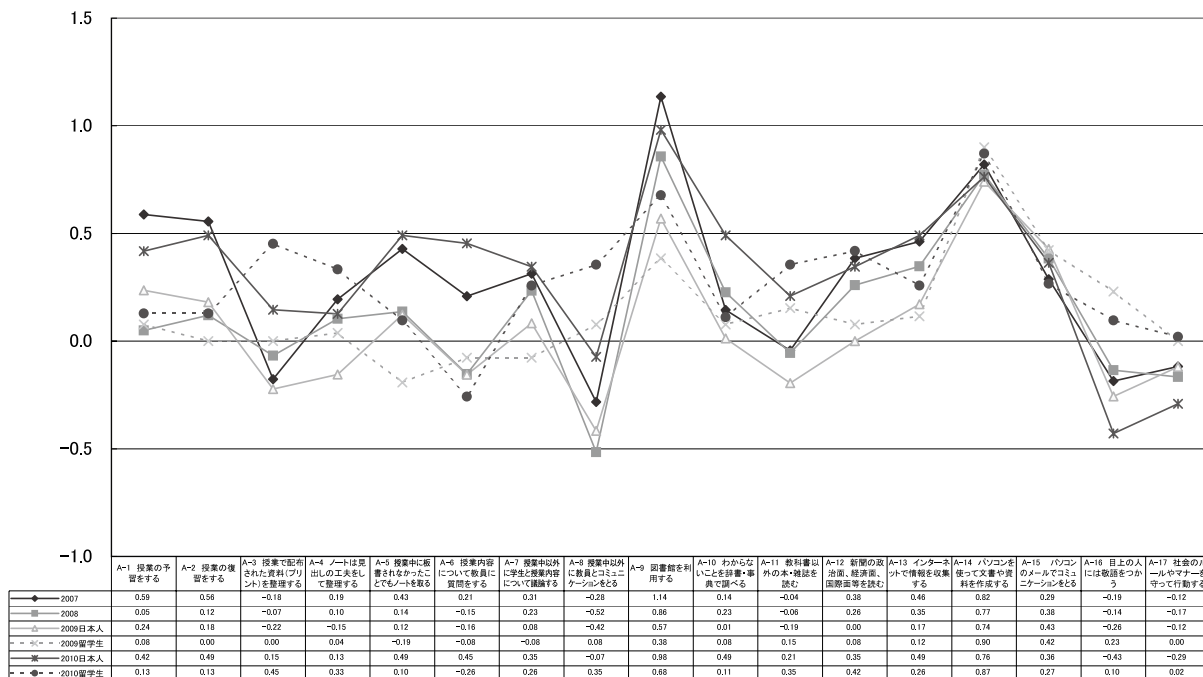


図4 学習態度(大学入学時)

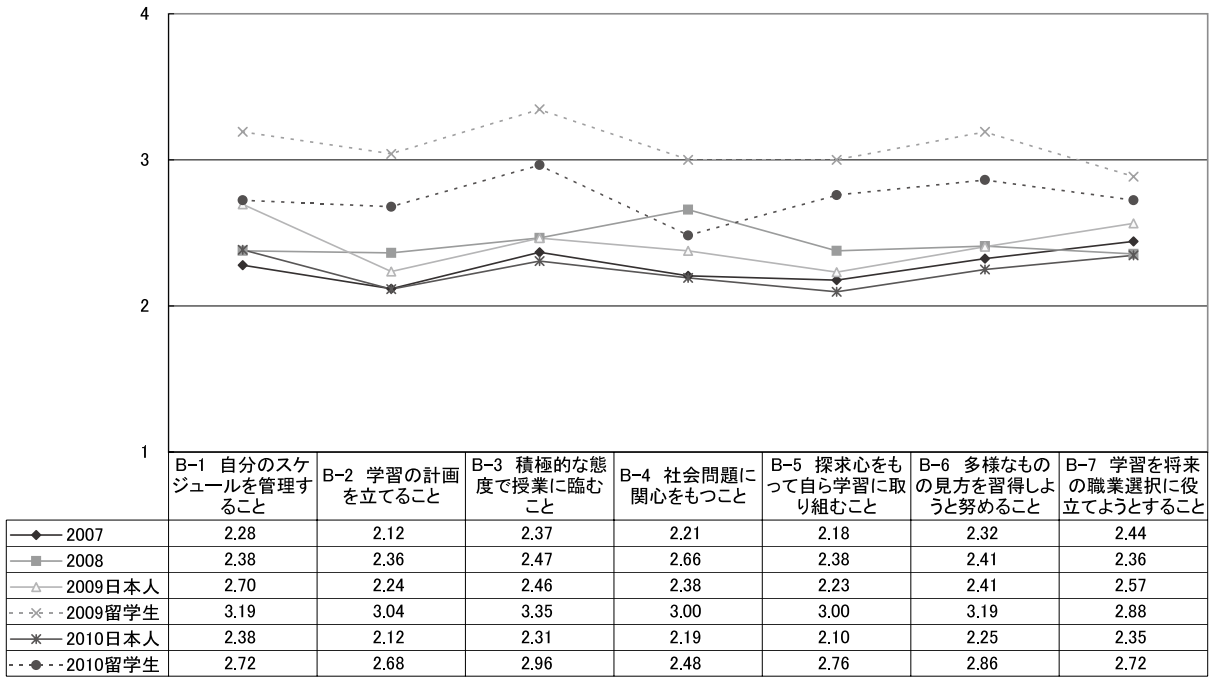


図5 学習態度(第1 Semester 終了時)

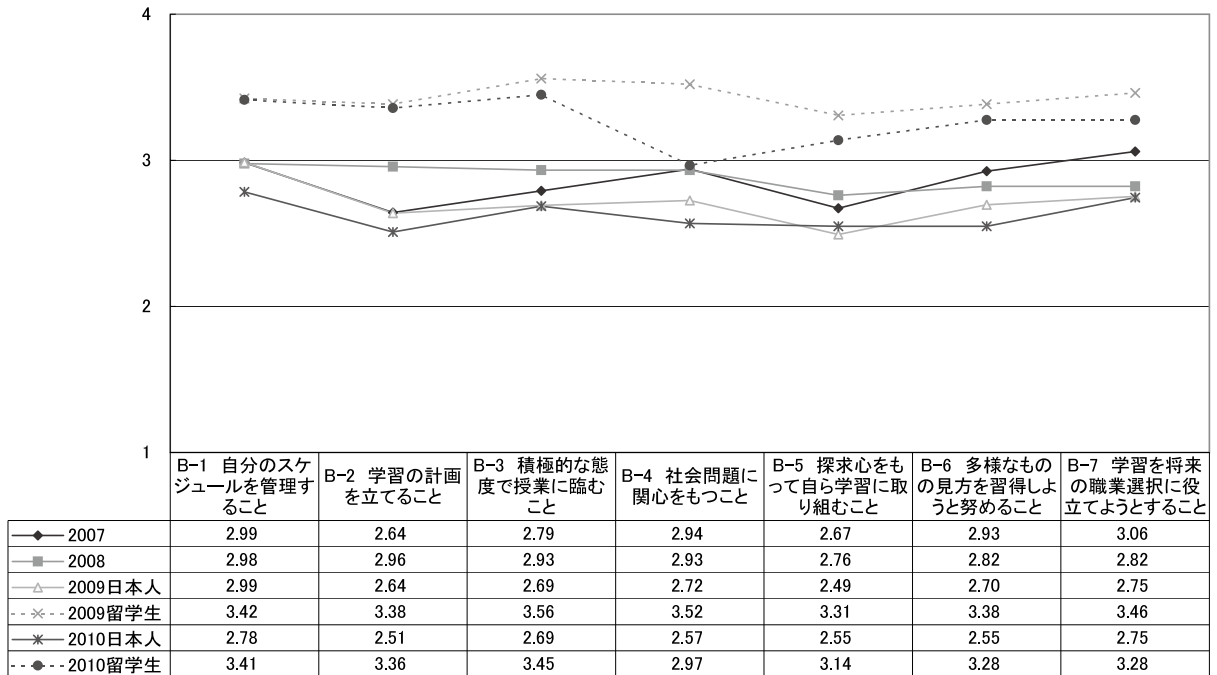


図6 学習態度(伸張度)

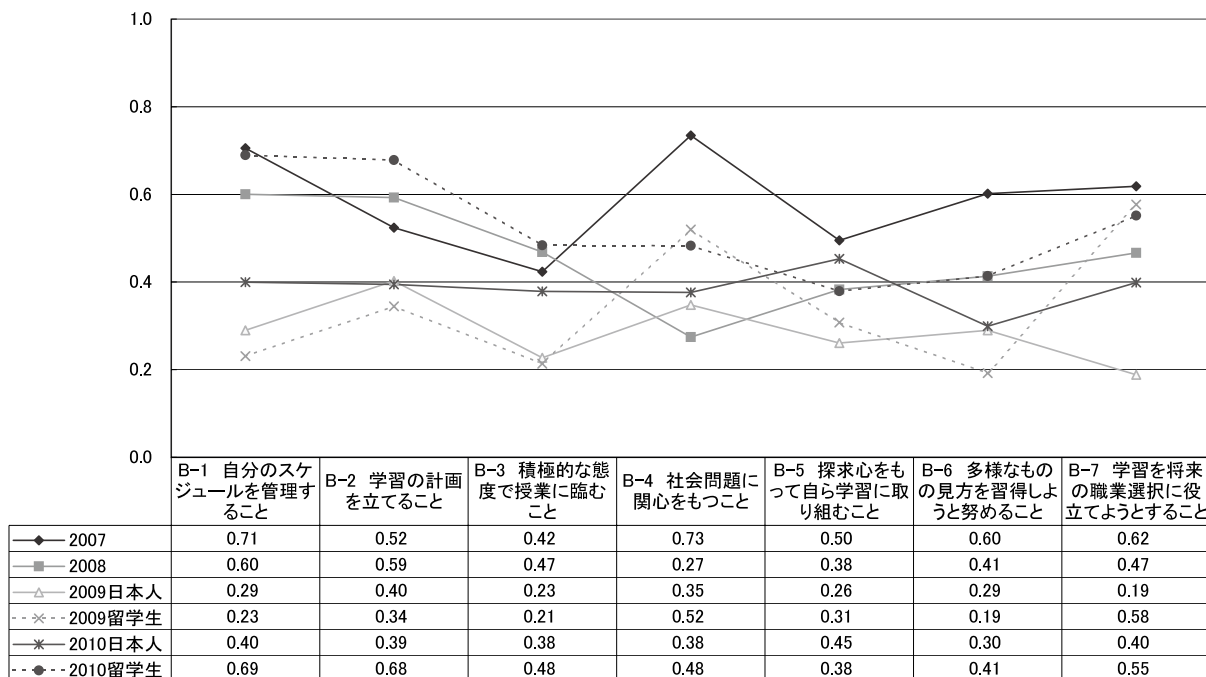


図7 学習スキル(大学入学時)

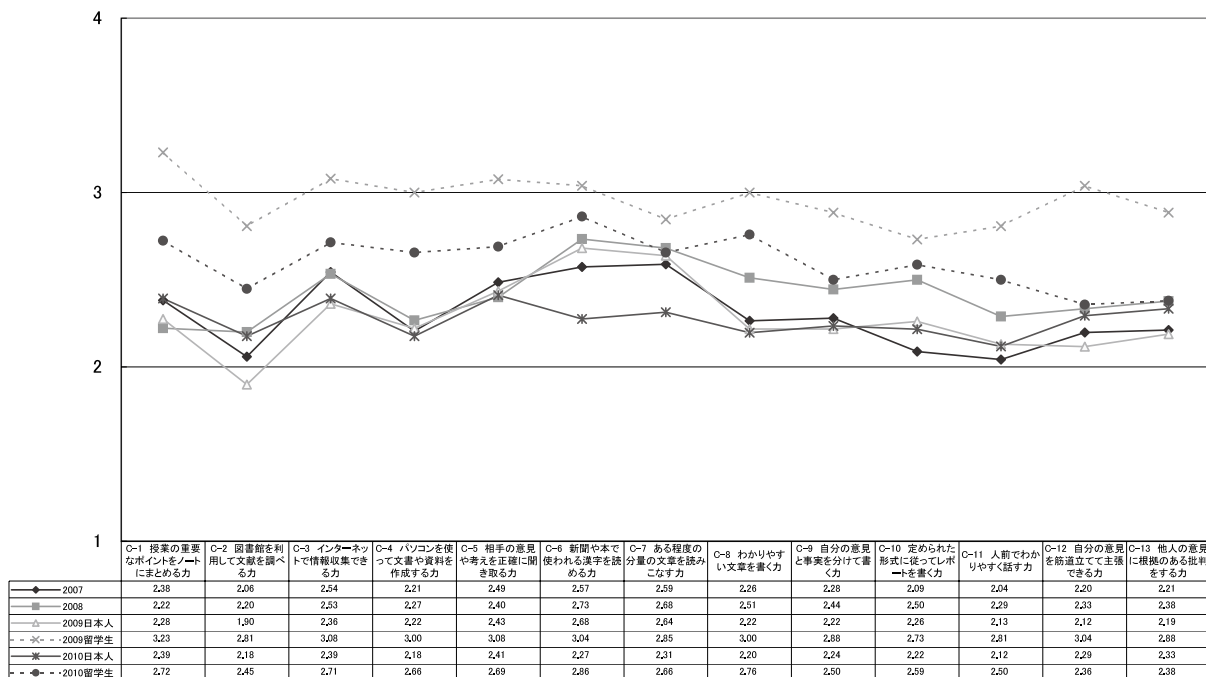


図8 学習スキル(第1セメスター終了時)

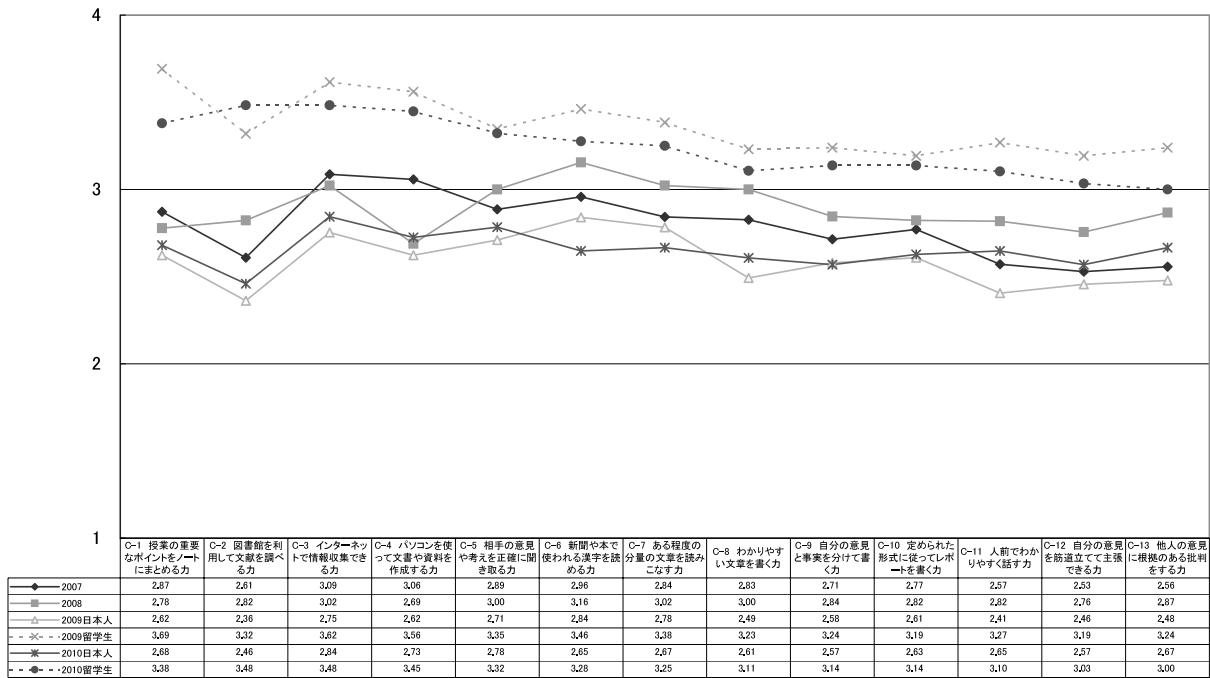
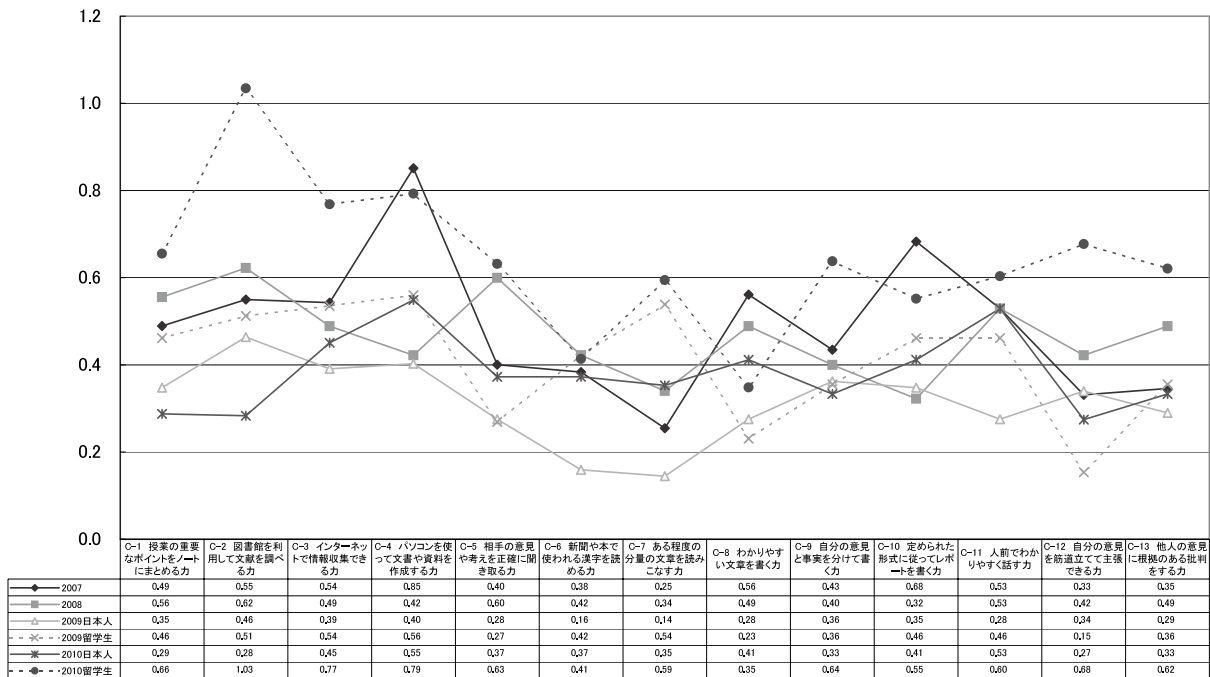


図9 学習スキル(伸張度)



本アンケート調査は7私立大学を対象に2003年7月に行われた「一年次教育のニーズとプログラム評価に対する調査」<sup>2</sup>を参考に設計されたものであるが、同調査と比較可能な項目についてグラフにまとめたものが図10～図16である。

図10 全国平均との比較:学習態度(大学入学時)

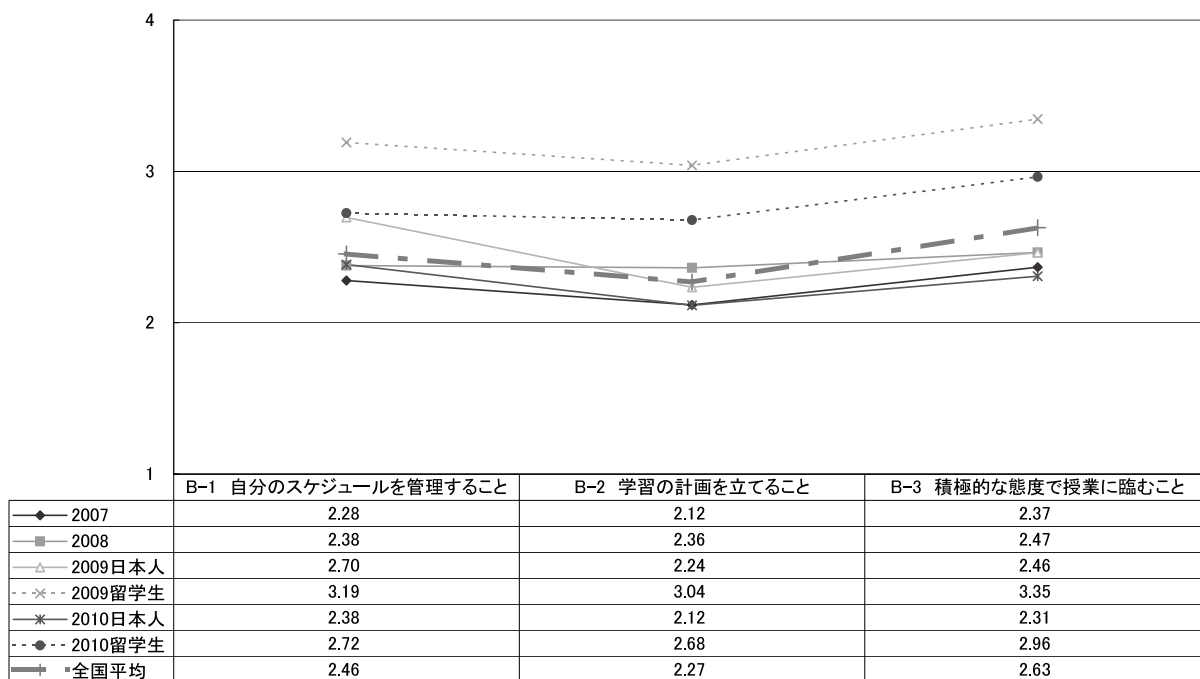
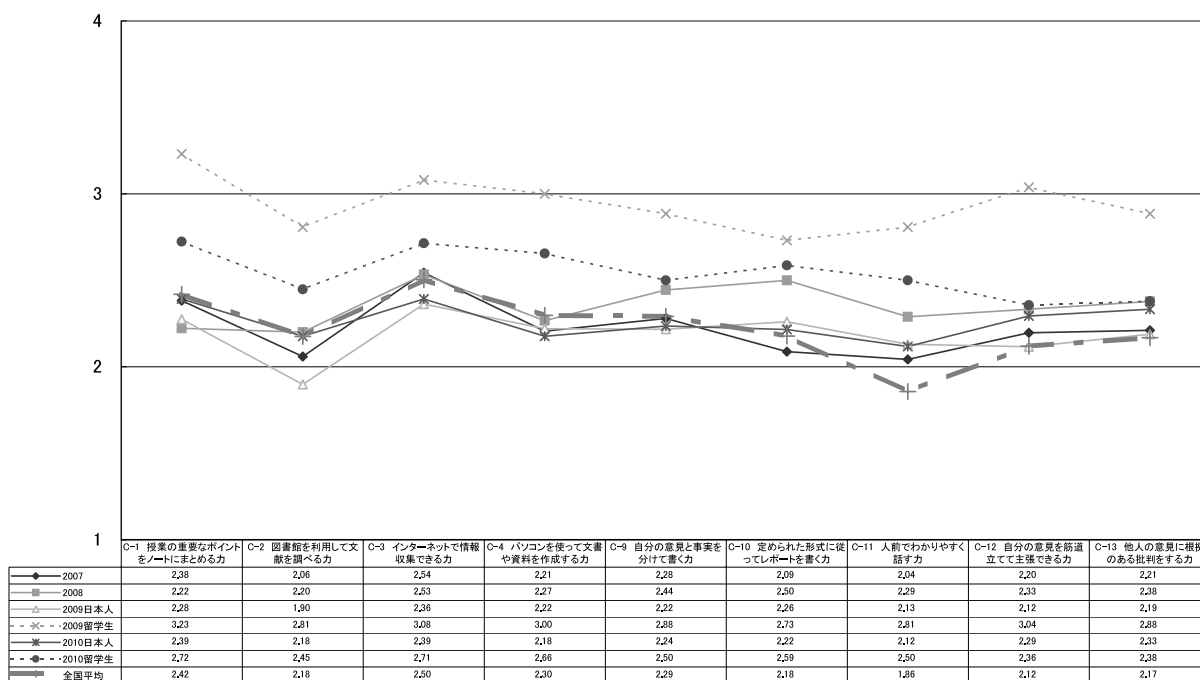


図11 全国平均との比較:学習スキル(大学入学時)



2 日本私立大学協会附置私学高等教育研究所(2005)を参照のこと。

図12 全国平均との比較:日頃の学習習慣・生活習慣(第1セメスター終了時)

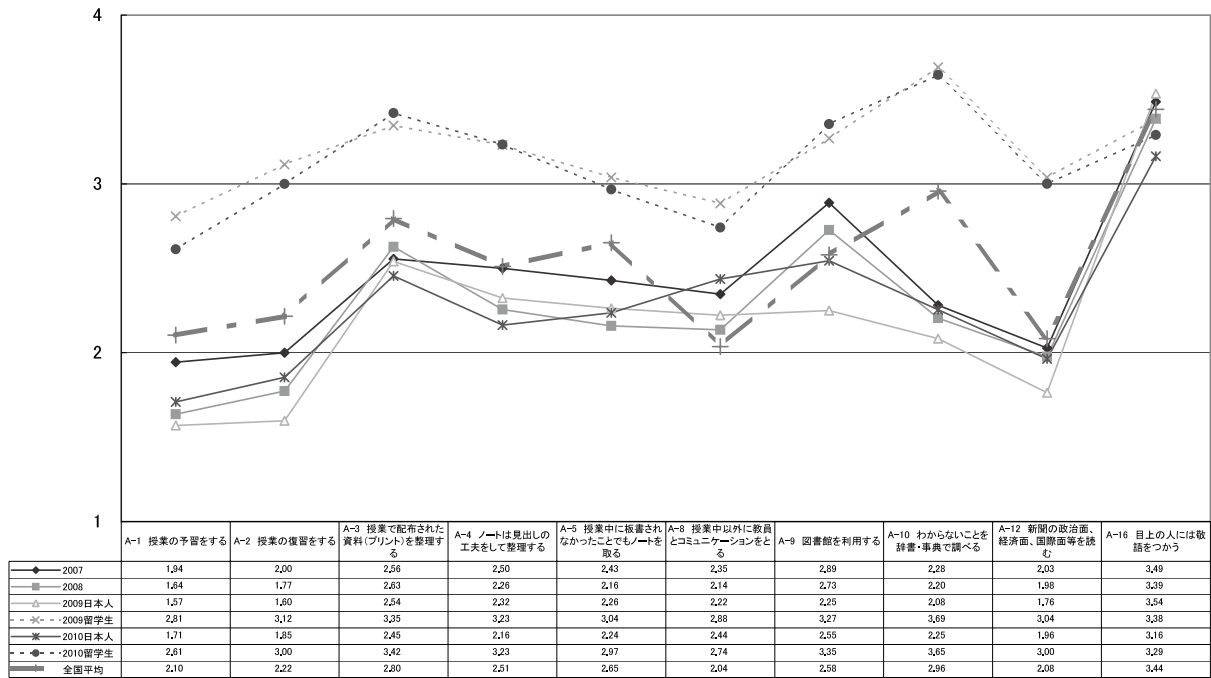


図13 全国平均との比較:学習態度(第1セメスター終了時)

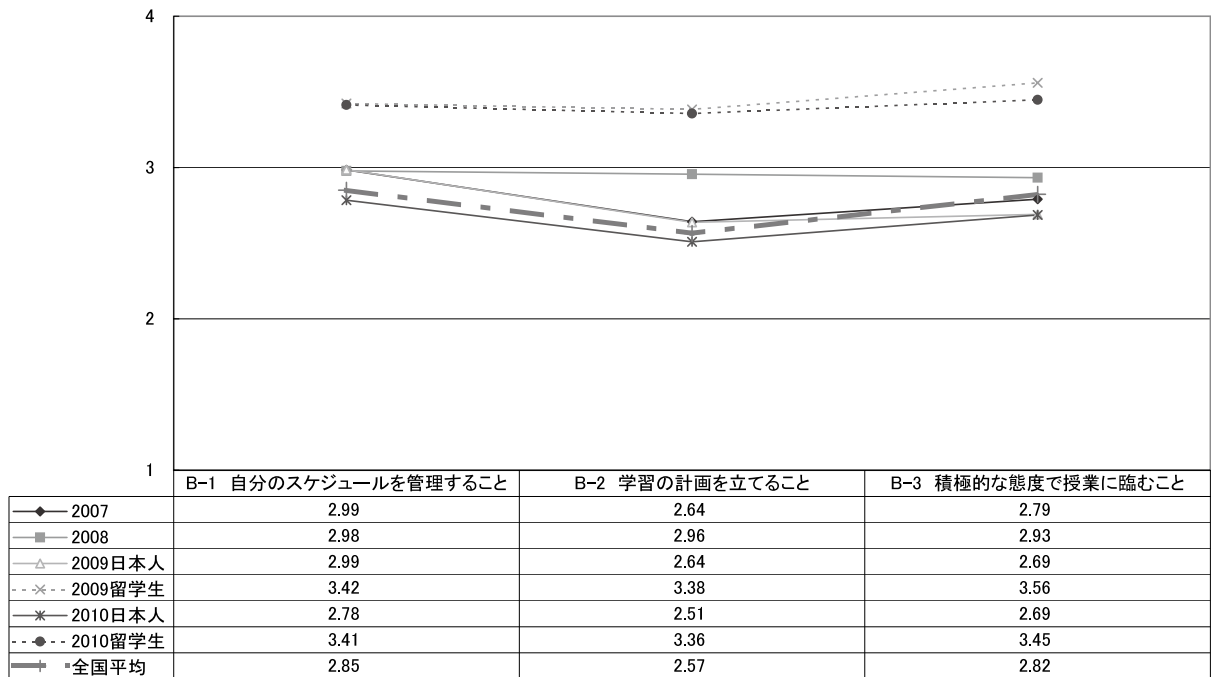




図14 全国平均との比較:学習スキル(第1セメスター終了時)

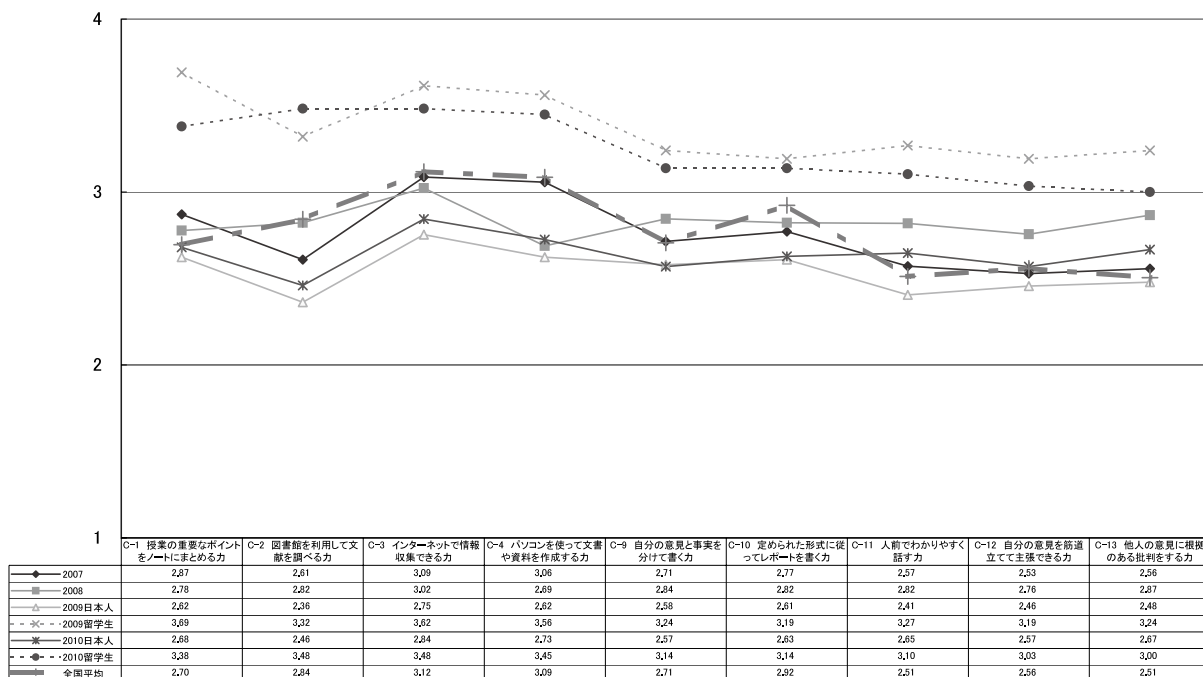


図15 全国平均との比較:学習態度(伸張度)

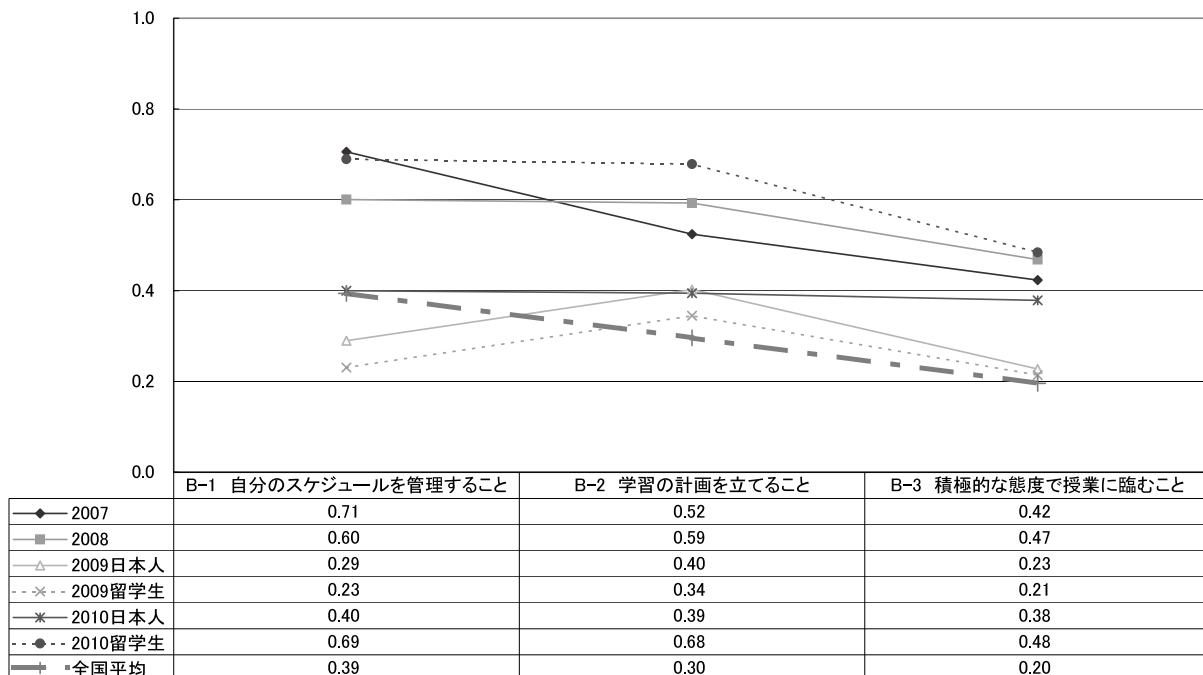
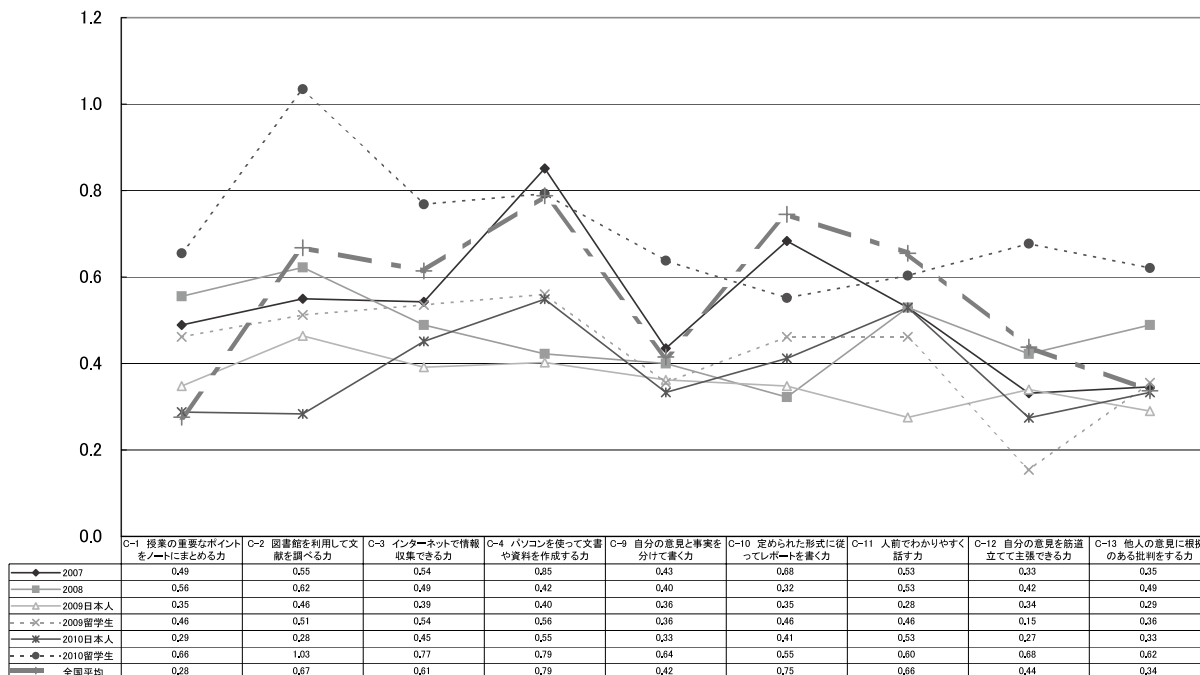


図16 全国平均との比較:学習スキル(伸張度)



### Ⅲ 分析

#### Ⅲ-1 本学における留学生と日本人学生との比較

図1～図9より、一見して、留学生は日本人学生と比較して際立った特徴を示し、かつ、概して自己評価が高いことが伺える。ただし、全般的な自己評価の高さは文化の違いを反映している可能性もあることから、以下、留学生と日本人学生とのそれぞれについて2009年度及び2010年度の平均を算出し、両者の差が大きい項目及び小さい項目に注目するものとする。

図1「日頃の学習習慣・生活習慣（高校時代）」において、差が大きい項目を順に4つ挙げると、A-10「わからないことを辞書・事典で調べる」、A-2「授業の復習をする」、A-15「パソコンのメールでコミュニケーションをとる」、A-1「授業の予習をする」である。一方、差が小さい項目を順に4つ挙げると、A-16「目上の人には敬語をつかう」、A-8「授業中以外に教員とコミュニケーションをとる」、A-17「社会のルールやマナーを守って行動する」、A-11「教科書以外の本・雑誌を読む」である。

A-10「わからないことを辞書・事典で調べる」については日本語辞書（ほとんどの場合において電子辞書）の使用が多数を占めるものと思われるが、A-2「授業の復習をする」及びA-1「授業の予習をする」と合わせて、向学心の高さが伺える。日本の若者の間では携帯メールによるコミュニケーションが特異な発達を遂げていて却ってパソコンメールによるコミュニケーションの普及を妨げているきらいがあるが、A-15「パソコンのメールでコミュニケーションをとる」より、留学生はパソコンメールを使いこなしている様子が伺われる。

A-16「目上の人には敬語をつかう」については留学生の方が低いほどであるが、筆者が日常接する限りにおいて、特に留学生の方が無礼であるとは感じられない。むしろ、日本語の難しさの象徴である敬語に対する苦手意識の表れであろう。A-8「授業中以外に教員とコミュニケーションをとる」については、「高校時代」に日本語学校

も含まれているであろうことも考慮に入れるべきであろうが、あるいは高等学校における指導方針の内外における違いを反映しているのかも知れない。A-17「社会のルールやマナーを守って行動する」については、もともと日本人学生の絶対値も高いことから差が出なかったものであろう。A-11「教科書以外の本・雑誌を読む」については、あるいは学校の勉強で手一杯だったのかも知れない。

図2「日頃の学習習慣・生活習慣（第1セメスター終了時）」において、差が大きい項目を順に4つ挙げると、A-10「わからないことを辞書・事典で調べる」、A-15「パソコンのメールでコミュニケーションをとる」、A-2「授業の復習をする」、A-12「新聞の政治面、経済面、国際面を読む」である。一方、差が小さい項目を順に4つ挙げると、A-16「目上の人には敬語をつかう」、A-17「社会のルールやマナーを守って行動する」、A-8「授業中以外に教員とコミュニケーションをとる」、A-11「教科書以外の本・雑誌を読む」である。概して高校時代と違いはないようである。

図3「日頃の学習習慣・生活習慣（伸張度）」において、差が大きい項目を順に4つ挙げると、A-16「目上の人には敬語をつかう」、A-8「授業中以外に教員とコミュニケーションをとる」、A-3「授業で配布された資料（プリント）を整理する」、A-11「教科書以外の本・雑誌を読む」である。一方、差が小さい項目を順に4つ挙げると、A-5「授業中に板書されなかったことでもノートを取る」、A-6「授業内容について教員に質問をする」、A-2「授業の復習をする」、A-9「図書館を利用する」である。

伸張度の差が大きい項目はいずれも高校時代の差が小さい項目に対応しており、「伸びしろ」の大きさによるものであろう。一方、伸張度の差が小さい（むしろマイナスである）項目はA-2「授業の復習をする」を除いて必ずしも高校時代の差が大きい項目に対応しておらず、「伸びしろ」の小ささによるものではない。のみならず、特にA-6「授業内容について教員に質問をする」については両年度とも伸張度の絶対値がマイナスとなっており、気になるところである。一方、A-8「授業中以外に教員とコミュニケーションをとる」については前述したように伸張度の差が2番目に大きくなっており、「授業中以外の教員とのコミュニケーションは増えているものの授業内容についての質問は少なくなっている」という奇妙な事態となっている。授業内容については質問するまでもないと留学生が考えているとすれば、むしろ授業内容が留学生にとって物足りない水準であることを示唆しているのかも知れない。

図4～図6の「学習態度」については、特段の特徴を見出すことは困難である。

図7～図9の「学習スキル」についても、特段の特徴を見出すことは困難である。

### Ⅲ－2 年度間の比較

次に、年度間の比較を行う。

図1「日頃の学習習慣・生活習慣（高校時代）」、図4「学習態度（大学入学時）」、及び図7「学習スキル（大学入学時）」より、A-16「目上の人には敬語をつかう」の1項目を除く全ての項目において高校時代または大学入学時についての留学生の自己評価が2009年度から2010年度にかけて低下していることが分かる。

ただし、図2「日頃の学習習慣・生活習慣（第1セメスター終了時）」、図5「学習態度（第1セメスター終了時）」、及び図8「学習スキル（第1セメスター終了時）」より、ほとんどの項目において留学生の自己評価の年度間の差は縮小し、一部の項目においてはむしろ向上している。このことは、図3「日頃の学習習慣・生活習慣（伸張度）」、図6「学習態度（伸張度）」、及び図9「学習スキル（伸張度）」より、ほとんどの項目において留学生の自己評価の伸張度が2009年度から2010年度にかけて向上していることから裏付けられる。

### Ⅲ－３ 全国平均との比較

最後に、全国平均との比較を行う。

図10「全国平均との比較:学習態度(大学入学時)」及び図11「全国平均との比較:学習スキル(大学入学時)」より、大学入学時の学習態度と学習スキルについて、本学の日本人学生と全国平均とはほぼ同様の傾向を示しているとともに、全ての項目において本学の留学生が上回っていることが分かる。図13「全国平均との比較:学習態度(第1 Semester終了時)」及び図14「全国平均との比較:学習スキル(第1 Semester終了時)」より、第1 Semester終了時についても同様の傾向が伺われる。

図12「全国平均との比較:日頃の学習習慣・生活習慣(第1 Semester終了時)」より、第1 Semester終了時の日頃の学習習慣・生活習慣について、A-16「目上の人には敬語をつかう」を除いて、全ての項目において本学の留学生が上回っていることが分かる。多くの項目において本学の日本人学生と全国平均とはほぼ同様の傾向を示しているが、A-10「わからないことを辞書・事典で調べる」の本学の日本人学生が際立って下回っていることが注目される。一方、A-8「授業中以外に教員とコミュニケーションをとる」において、全ての年度で本学の日本人学生・留学生とも全国平均を上回っているのは、本学におけるきめ細かい指導の表れであると自負できよう。

## Ⅳ おわりに

以上の分析より、以下のことが言えよう。

留学生の自己評価は、本学の日本人学生と比較しても全国平均と比較しても、ほとんどの項目において上回っている。ただし、全般的な自己評価の高さは文化の違いを反映している可能性がある。

特に留学生の自己評価が高いのは、A-10「わからないことを辞書・事典で調べる」、A-2「授業の復習をする」、A-1「授業の予習をする」といった項目であり、向学心の高さが伺われる。ただし、高校時代(入学前)と第1 Semester終了時とを比較すると、「授業中以外の教員とのコミュニケーションは増えているものの授業内容についての質問は少なくなっている」という奇妙な事態となっており、向学心に応える授業内容となっているか検討の余地がある。

一方、気になる傾向として、高校時代または大学入学時の留学生の自己評価が2009年度から2010年度にかけて低下していることが挙げられる。第1 Semester終了時にはその差は縮小しているものの、上記の傾向は、アドミッション・ポリシー及びカリキュラム・ポリシー(特にリメディアル教育及び初年次教育)に課題を投げかけているものと言えよう。

留学生及び全国平均との比較において、本学の日本人学生の課題もまた明らかとなった。本学の日本人学生の自己評価が際立って低いのはA-10「わからないことを辞書・事典で調べる」である。学力向上以前に、まずは学習意欲の向上及び学習習慣の確立が求められている。幸い、A-8「授業中以外に教員とコミュニケーションをとる」の本学における自己評価は全国平均と比較しても高いので、これを基礎により一層のきめ細かな指導が期待される。

## 参考文献一覧

- 奈良産業大学ビジネス学部一年次教育・テキスト作成委員会 (2008) 「第1 セメスターにおける導入教育の自己評価に関する調査結果 (2007 年度及び 2008 年度)」『奈良産業大学社会科学学会 NEWSLETTER』 No.2、2008 年 12 月、13-23 頁。
- (2009) 「第1 セメスターにおける導入教育の自己評価に関する調査結果 (2009 年度)」『奈良産業大学社会科学学会 NEWSLETTER』 No.3、2009 年 12 月、13-23 頁。
- (forthcoming) 「第1 セメスターにおける導入教育の自己評価に関する調査結果 (2010 年度)」『奈良産業大学社会科学学会 NEWSLETTER』 No.4、近刊。
- 日本私立大学協会附置私学高等教育研究所 (2005) 『私立大学における一年次教育の実際』 (私学高等教育研究叢書 4) 日本私立大学協会附置私学高等教育研究所、2005 年 3 月。
- 山本英司 (2008) 「奈良産業大学における初年次教育——ビジネス学部を中心に——」『奈良産業大学紀要』 第 24 集、2008 年 12 月。